

# Fantasyのにないてとしての妖精たち

津 島 克 子

妖精物語といえばfantasyを想像するわけであるが、1章ではこのfantasyが児童文学にあらわれるのに時代によって変化があったことをみてゆく。2章では、そのfantasyの荷い手の一部とみられる妖精をその種類と特徴から見る。3章は、古典的といえるGrimmの妖精物語からエルフの登場する例を二つあげて、その特徴をまとめ、また4章は、新しいタイプの妖精をNesbitの作品の中にもみることにしたい。

## 1. 児童文学の流れと妖精物語

児童文学の中には、大人の読み物として、書かれたものが、子供たちの興味をひき、今日まで読みつがれているものがあり、また逆に、子供たちの為に書かれたものが、大人の間でも読みつがれているものもある。前者の中には、スウィフトの『ガリヴァー旅行記』、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』があり、後者には、ルイス・キャロルの「ふしぎの国のアリス」、ロフティングの『ドリトル先生物語』がある。これは、イギリス、アメリカ共通に言える。しかし、物語の内容について見ると、イギリスのものは、海を対象にしたものが多く、神秘的でファンタジーな妖精、小人などをあつかったものが多い。また古いものには、階層、宗教をあつかったものもある。それに対し、アメリカのものは、舞台が、ほとんど陸上で力強く、コーモアにあふれている。しかし、イギリスにあるような、しっとりしたファンタジーは、少ない。

妖精が児童文学の中に登場するのは、遅い。その理由は、17世紀の頃妖精が登場するような、空想的なものは、子供の教育に良くないものとされ、特にピューリタンたちには、有害であるとして、きらわれたため

である。しかし、18世紀は、子供のための作品、特に小説が、多く生まれた時代であり、小人の出て来るスウィフトの『ガリヴァー旅行記』のような、空想を託すものが、子供たちの心をつかんだ。そして、イソップの様な寓話や、フェアリー・テールズが少しづつ出て来た。しかし、まだ妖精の登場する作品は、文学としては、認められていなかった。

19世紀前半には、『シェイクスピア物語』が子供の世界に、また『グリム童話』がイギリスに入ってきたが大きな進展には、ならなかった。キャサリン・シンクレア(1800~1864)の『別荘物語』では、18世紀までの教訓性をもちながら、ファンタジーの要素をも、持ち合わせている。

19世紀の後半になると、アンデルセン童話が入り、型にとらわれない、ファンタジーの世界が開けてきた。そして、妖精の登場する作品が、次々に発表された。フランシス・ブラウンの『おばあさんのふしぎないす』、サッカレーの『バラと指輪』、ルイス・キャロルの『ふしぎの国のアリス』、チャールズ・キングズリーの『水の子』、ジョージ・マクドナルドの『妖精とおつきあい』などがある。

そして、20世紀に入ると、今までの宗教的な教訓性は、うすらぎ、ほんとうのファンタジーの世界が開き始める。その代表と言えるのがネズビットであり、彼女の作品、『砂の妖精』である。妖精や魔法は、夢の世界だけでなく日常生活の中に介入してくる。以後、次々とファンタジーな作品が発表される。パリの『ピーターパン』、ド・ラ・メアの『サル王子の冒険』、ロフティングの『ドリトル先生』シリーズ、ミルンの『プーさん』、トラヴァースの『メアリー・ポピンズ』、そしてトールキンの『ホビットの冒険』と、ノートンの『床下の小人たち』シリーズなどは、有名である。

実際のところ、12世紀以前から妖精物語があるにもかかわらず、以上のように、児童文学の中に取り入れられ生活に密着してきたのは、20世紀に入ってからということになる。

## 2. 歴史的に見たフェアリーとその種類

妖精そのものの性格も、少しずつ変化してきた。昔は、話の中でその個性は弱く、なかば、神的存在であり、強い魔力を備えていた。その魔力は次第に弱まり、妖精個々の、個性が強くなっていった。そして、神的存在といったものではなくなり、出現する場所も、次第に子供の世界へ追いやられてしまう。

妖精物語は、時代にかかわらず、その妖精の、習性、性格などによって、何種類かに区別でき、妖精の呼び名も異なる。

Floris Delattre は、妖精をその特性によって大きく三つに分けている。それは、1.チュートン神話のエルフ(Elves)。2.ケルトの伝統をひくフェアリー(Fairies)。3.アーサー王騎士物語のフェ(Fays)である。次にこの三つについて少し詳しくとりあげてみたい。

### i Elfについて

Elfの中には、次のような種類がある。

#### ボーグル(Bogle)

スコットランドの人を驚かすゴブリン。意地が悪く人に対しても害を与えるものが多い。

#### ブラウニー(Brownie)

スコットランド高地地方、および、コーンウォールの性質の良いゴブリン。親切で家事の手伝いなどもしてくれる。

#### ドワーフ(Dwarf)

地底に住み、木の下にすわって大声で叫んだりする。金銀細工の特技を持っている。

#### ホブゴブリン(Hobgoblin)

家霊、守護精霊。

#### コボルド(Kobold)

とくにドイツの民間伝説に出る。親切だがいたずら好きな家霊。

ケルピー(Kelpie)

スコットランドの民間伝説に出てくる馬の姿をした水の精。

ニックス(Nix)

ドイツの民間伝説に出てくる水の精。姿は人間の形をしている。

トロル(Troll)

さまざまな姿、形、性質で北欧神話に登場する。

いづれも北方神話の中に良く現われる。人間の姿をしているものもあるが一般に小さく、わずか数インチ程度のもが多い。中には姿の良くないものもいるが、すばらしく妖しい姿で人間の心をさそうものもいる。一般に、きれい好きで、人間が部屋をよごしていると、かたづけたり、人のいやがる仕事をきれいに早く仕上げてくださいたりもする。しかし、その事に対して人間がお礼をきちんとしないと、人間や動物に対して意地悪をしたり、病気にしたり魔法をかける事がある。

彼らは、群れをなしているもの、川、山、森、野原などに集団で住むもの、例えば、ホーグル(Bogle)、ドワーフ(Dwarf)、トロル(Troll)と、単独で、川、人間の家の中などに生活するもの、例えば、ブラウニー(Brownie)、ホブゴブリン(Hobgoblin)、コボルド(Kobold)、ケルピー(Kelpie)、ニックス(Nix)、とに分けることができる。

ii FairyならびにFayについて

Fairyは、女性とは限らないが、女の姿をしたものは、概して美しい。シンデレラに出て来る魔法使いは、Fairy-Godmotherである。姿は人に似た形をしている。そして魔力を持つものと持たないものがある。Fairy、Elf に共通した特徴は、人間の仕事を手伝うが、それに対し、お礼をしなくてはいけない。子供を産んだり育てたりすることもへたである。

Fairyの語の起源は比較的新しく、フランス語(OF. fol mod. F. fee)に由来する。1300年~1600年頃には、The land or home of the fays; fairy land即ち、faysの国の意味や、A collective term for the fays

or inhabitants of fairy land即ちfaysを集合的に指す意味でも使われていた。このfayの語もfairyと同様OF.のfaeから来た形で、これはさかのぼればfate(運命)の意味のラテン語 *fatum*の複数形 *fata* (the Fates 運命を仕どる三人の女神) に由来する。現在fayもfairyも同じ意味。One of a class of supernatural beings of diminutive size, in popular belief supposed to possess magical powers and to have great influence for good or evil over the affairs of manで使われるが、fayの方が古めかしく、従ってあまり一般的な語ではない。

Fay-erieは、最初、魔法にかける状態、または、魔法そのものの事であった。

Fairyに相当するものは、現在広範囲に及んでいて、アングロサクソンとスカンディナヴィアのElves; スコットランドのハイランド地方の、Daoine Sidhe; アイルランドのTuatha De Danann; ウェールズにはTylwyth Teg, The Seelie CourtとThe Unseelie Court, The Wee FolkとGood Neighbour がある。彼らは群れをなしている妖精と群れをなさないものがあり、またその大きさについては、人間と同じ位の妖精と、人間よりも大きい妖精、小さい妖精があり、中には3本足のものもいる。このように外形がさまざまな妖精はまた、その性格によって、人間に慣れたものと、人間をさけるタイプの妖精とに分けることができる。その住む所は、主として森の中や森の洞穴の中であるが、湖や小川に住むものもおり、人に慣れたものなどは、家の中であったりするのに対して、逆に人をさけた地下のほら穴に住んでいる妖精もある。海によく出る精や、不思議なHag(魔女)、Monster(怪物)、Bogle(幽霊)は、Fairy Animalsと見なされる。

### 3. Grimmの妖精物語から

*The Secret Shoemakers* と *Rumpelstiltskin* の二つを見てみよう。この二つの物語を比較してみると共通しているのは、主人公が貧しい

くつ屋の老夫婦や貧しい粉屋の娘であって、貧しい者のところへ小人が現われ、その仕事を手伝う事である。相違点としては、*The Secret Shoemakers*の小人が現われるのは、常に真夜中であり、主人公の夫婦と話しをすることはない。*Rumpelstiltskin*の小人が現われるのは夜に限らず特に時間は決まっていない。また主人公の娘との会話もある。そして仕事に対する報酬の仕方も、*The Secret Shoemakers*の小人は、強いて望まないが、夫婦がそっとお礼を用意しておく、それに対し、*Rumpelstiltskin*の小人は、仕事をするたびに、品物との交換を要求することなどが相違としてあげられる。

#### i) *The Secret Shoemakers*

貧しいくつ屋の老夫婦には、くつ一足分の皮しか残っていなかった。その皮が、朝になると、りっぱなくつにでき上っている。そのくつは、すぐに売れ、新しい皮を買う事ができた。そういう事が何日か続き、不思議に思った夫婦は、ある夜そっで見ていると、真夜中に、どこからともなく、小人が二人現われ、くつを作り始める。そして夫婦は小人のために、服とくつを作り、お礼をする。

この二人の小人は、Elfの特徴をよく表わしている。ドラットルは、エルフを明るいエルフと暗いエルフに分けている。明るいエルフは光と空のエルフで、外形も美しい者が多い。暗いエルフは、森や洞穴に住み、外形も、みにくく、小さい。この二人の小人が物語に登場するのは、いつも真夜中であり、姿は人間の形をしているが小さいので暗いエルフに入る。そして魔法を使うわけではないが、非常な早さでくつを仕上げて行くのであるから、やはり不可思議な力をもっている。また、くつ屋の夫婦も小人に対して、きちんとお礼をしているのも妖精物語の特徴の一つである。

#### ii) *Rumpelstiltskin*

貧しい粉屋が王様に、自分の娘は、わらを金糸に紡ぐことができると

言ってしまう。王は納屋にあるわら全部を朝までに金糸にしておく事を命じ、できなければ殺すという。困った娘の前に突然小人が現われ、娘のしているネックレスと交換に自分がわらを金に変えると言う。これを喜んだ王様は、またわらを持って来る。今度は指輪と交換でやってくれる。やがて交換するものがなくなると、小人は娘が結婚し子供ができたから最初の子をもらうという約束をさせてしまう。王様のお妃となった娘に子供が生まれる。その時小人は、自分の名前を言いあてたら約束はなかった事にするとする。そこで、王女は小人が一人言を言っているところを聞いてついに名前をあてることができた。

このelfは、物語の中では、tinyman、或いは mannikin と呼ばれているように、外見は人間と同じだが小人である。このようなelfをdwarfという。そして人間のできない事を不思議な力でやりとげるが、やはりその報酬として品物を要求する。その要求として子供をほしがることがあるのも特色の一つで、妖精は子供を産むことがへたであり、生まれても、あまり器量が良いために人間の子をほしがると言われている。

#### 4. Nesbitの妖精

Edith Nesbit (1858~1924) は、ロンドンで生まれ、ディムチャーチといういなか町で亡くなった。父親はロンドンで大きな農業学校を経営していたが、彼女が4才の時に病気のため死亡。その後母親と5人の兄弟とヨーロッパ各地に住んでいた。小説家になりたいというのが子供の頃からの夢で17才の時始めて詩を雑誌に発表した。21才の時、新聞記者と結婚したが、金銭的に恵まれず、生活を支えるために恋愛小説、詩、批評、クリスマスカードに絵を書くなど、さまざまな事をした。彼女には5人の子供がいたが、常に友達のような態度で接し、作品も「常に子供になり、子供の物の見方、考え方を持ち、子供の立場に立って書く事ができた作家である」と言われている。40才の時に、楽しかった子供時代の体験をもとにした *The Story of the Treasure Seekers* (『宝さ

がしの子供達』)を書いた。それ以後、次々と子供向きの作品を書きあげた。

彼女の作品に登場する子供たちは、昔の本に出てきた子供たちとは異なり、元気がよく、いたずらやけんかもする、ごく普通の子供たちである。そして物語の中に個性の強い妖精を登場させたのは、彼女であった。

彼女の作品から妖精の性格を見てみよう。

### *Five children and it*

ロンドンの郊外に住んでいる5人の兄妹達がジャリ掘り場で遊んでいると妙な生きものを見つける。それは自分で「砂の妖精」だと言い、一日に一つ子供たちの願いを魔法でかなえてくれるという。しかし、子供たちの願い事は、結局どれも満足な結果を得られないで終わる。

この物語に登場する妖精は、Sand-Fairy砂の妖精である。その名前はPsammead(サミアド)昔は仲間がたくさんいたが、現在は非常に少なくなった。風貌と言えば、カタツムリのような目、コウモリのような耳、クモのような毛がはえているおなかや、足やうでをしている姿は、まるでサルのようなものだった。昔からのFairyという言葉から得るイメージとは、かなりかけ離れている。性格も強く、高慢な口をきき、お天気屋で、あまり魔法を使いたがらない。そしておこりっぽく争い事を好まないのも、Fairyの特徴そのままである。魔力の衰えが激しく、すぐには魔法をかけられなかったり、その魔法も一日しかもたず、日がくると消えてしまう。

Nesbitが生み出した妖精 Psammead は、このように、従来の妖精に比べて、きわめて個性が強かった。